

## 人間の生きる理由

ローマ9：14－33

イエスを信じた者はみな、新しく生まれた者である。そして神の子とされ、自由に生きることがゆるされている。しかし、この自由を私たちは本当にわかっているだろうか。もしかしたら、その自由を十分に味わうことができていないのではないか。私自身はどうだろうか。

今日の箇所を見てみよう。「私（神）は私のあわれむ者をあわれみ、私のいつくしむ者をいつくしむ。」という神の言葉に続き、「ことは人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神による」という使徒パウロの言葉が続く。これをまとめて言えば、創造者なる神は人を煮て食おうが焼いて食おうが、自由放任にしようが、皆殺しにしようが、また作り直そうが勝手気ままという意味である。神は何にもしばられず、完全自由に存在している。

私たち日本人は仏教的因果律の中で生きているので、これをしたらいいことがある、しなければ罰が当たる、また逆にいいことがあれば、日ごろの行いがいいからだ、わるいことがおきれば、何かまずいことをしただろうか、と考えがちだ。自分自身、クリスチャンであるのに、あの人がいろいろな大変な目に遭うのは、解放されていないからだ、罪を隠しているからだ、祈りがたりないのだ、み言葉を読まないからだ、交わりに参加しないからだ等々、理由を考えて得心しようと頑張ることがあった。

ユダヤ人は律法の枠内でこの生活に少し似たことをしてきたと思う。しかし、旧約のヨブ記を見れば、姑息な因果律を吹き飛ばす神の絶対的主権、すなわちなんでもできる、なんでもしているのだ、という姿が見られる。義人であったはずのヨブに最悪の事態が起きる。そしてそのことを神は悔いることもない。さらにヨブ当人も最後は神の絶対主権を認めてしまうという、なんとも爽快な落ちがついている。

つまり、人が泣こうがわめこうが、神は完全自由にことをなすことができるのである。そして主を信じる者はみな、この完全自由な神によって全く無条件に救われた。そして、神の子とされ、神の自由に預かるものとなったのである。

ある人は言う。

「救われるためには良い行いをしないとだめですよ。」「いいえ」

「免罪符を買うか、聖人像を買わないと救われないでしょう。」「いいえ」

「そうだ、献金をしよう。そうすれば救われる。」「いいえ」

「伝道して、人を救いに導けば救われるんですね。」「いいえ」

「そうです。あの有名な説教者に手を祈ってもらえれば救われるでしょう。」「いいえ」

「聖水か、油を注いで祈ってもらえれば、きっとすばらしい救いにあずかれる。」

「いいえ」

「霊的情熱的な賛美集会の中でこそ救いに導かれる。」「いいえ」

「私が信じると決心したから救われるのですね。」「まあ、そんな感じは多少あります。」

しかし聖書はこういうのです。「神が救うと決めたから、救われる」私たちが自分で決めたと思っている信仰でさえも主から与えられた賜物（恵み）なのです。

まとめてみましょう。

神は完全自由である。

人をどうしようが神の勝手である。

神は罪を犯した人間をさばくと決めた。

しかし、その中から選びの民を起こし、イエスの十字架を信じ、救われるように導かれた。

選ばれた人は「人のための神」から「神のための人」という世界に導かれた。

では私たちは神の道具にすぎないのか。その通り。いてもいなくてもいいのか。

その通り。しかし、神はその私たちを「愛する」と宣言され、「子とする」と言明し、「永遠のいのち」を与えられた。

さて今日、私たちはこの神の子として完全自由である。確かに「神のための人」ではあるが、何の条件も付けられていない。金銭も才能も時間もすべて勝手に使ってよい。ハレルヤである。あなたの人生、親も先輩も上司も牧師も誰もあなたをコントロールできない。そして神もあなたをコントロールしない。

今や神から福音をゆだねられた代理人、エージェントなのである。

主は私たちの罪を赦されただけでなく、主とともに完全自由に救いを世にもたらす代理人として私たちを召し、ともに歩んでくださる。何という恵み、栄誉だろうか。